

解答

- 問1 ニ 問2 □ 問3 3 問4 おとうさん
 問5 駅まででのチラシ配りや郵便受けへの投げこみは自分でもできるので、自分がやる〔ということ〕
 問6 イ 問7 ハ 問8 ト 問9 ハ 問10 ニ
 問11 (2) 生意気 (3) 余地 (5) 防水加工 (6) 筋
 問12 (1) おおや (4) けはい
 問1 □ 問2 □ 問3 ② ハ ③ ホ 問4 ニ 問5 理由
 問6 □ 問7 ニ 問8 リンゴをすすめる気持ち 問9 □
 問10 13 問11 イ・ハ・ト
 問1 イ 問2 ハ 問3 ニ 問4 イ 問5 ハ
 問6 ニ 問7 2 問8 ハ 問9 A ホ B イ C □

解説

- 出典は、^{ながの}長野まゆみ「^{のかわ}野川」(^{かわでしよぼうしんしゃ}河出書房新社)。
 問1 「耳をそばだてる」で、注意して聞こうとするという意味です。
 問2 「感情的なふるまいなど、はいりこむ余地がないほどきびしい現実^{おとわ}に立ちむかっている」とあることに注目しましょう。鳩は、休息を取りたいなどと考えることもなく翔びつづけているのです。
 問3 雨をこちよく感じているのは音和であることを考えると、音和が雨にぬれている場面に入れるのが適当です。
 問4 音和は、「父への不当なあつかい」について伯父に抗議しようとしたのです。「不当なあつかい」とは、「おとうさんは、もっとまともな仕事ができるのに、それをさせない」でチラシ配りをさせているということです。
 問5 「伯父に電話をしよう^{おとわ}と決意したとき」には、「自分にも何かができるとは、思っていなかった」が、「父の姿が、彼にそれを云わせた」とあります。つまり、「それ」が指しているのは、音和が父に話した中で、「自分にも何かができる」という内容のことだと考えられます。
 問6 出したままにしていたチラシを「あわてて片づけた」というところから、音和が父のいない間に、父に見つからないように、チラシを折っていたのだと読み取れます。
 問7 父は、伯父との関係を「ただの兄弟ゲンカ」だと思っていて、あまり気にしていないのです。そこに、息子が「憎しみあってる」というおかげさな言葉を使ったので、おかしくて笑ったのでしょう。
 問9 「この父」とは、かつての父とは様子が変わった、いまの父のことです。続く部分に、「身近になった父が、ありのままの姿を示してくれる」「かっこうつけているときより、ずっといい」とあります。息子に対して自分をよく見せようなどとせず、伯父とのことを話してくれたり、チラシ配りという仕事も嫌がらずにやったりしているいまの父を、音和は「好きだ」と感じているのです。
 出典は、^{なかじまよしみち}中島義道「きみはなぜ生きているのか？」(^{かいせいしゃ}偕成社)。
 問1 「そうはいかない」というのは、『茶色』と『赤』や『青』とを区別することができるように、「よい」ものそれ以外のものを区別することはできないということです。それは、「よいノート」「よい鉛筆けずり」「よい携帯電話」などと言ったとき、「よい」に「共通の性質」があるわけではないからです。
 問2 ⑤段落に注目しましょう。見ただけでわかる「茶色」という性質とちがって、『よい』とは、物をいくら外側から観察してもわからず、その役割とか使い方とかがわからなければわからない」とあります。
 問3 ②の「よく」は「上手に」、③の「よく」は「頻繁に」という意味で使われています。
 問5 「なんでよいリンゴなの？」という質問は、「～だからだよ」という答えを期待していて、「よいリンゴである理由」を聞くものです。
 問6 おじさんは「新鮮だし、大きいし、甘いし、栄養もあるし、それでいて安い」リンゴを「よい」リンゴだと考えています。けれども、「よい」をその言葉で言いかえてみると、「新鮮だし～安いリンゴだから、新鮮だし～安いリンゴなのさ」と、同じ言葉をくり返しているだけでまったく説明になっていません。
 問7 ①段落に、『よい』の意味は、いくらリンゴの性質を細かくあげていっても、明らかにならない」とあります。つまり、「新鮮だし、大きいし、甘いし、栄養もあるし、それでいて安い」というのは「よい」の意味ではなく、理由でしかなかったということです。そこで、『よい』はそのおじさんが『リンゴをすすめる気持ち』を表す言葉だと考えるとその問題が解決するということです。
 問8 空欄の直前に「いまのリンゴの場合も」とあるので、リンゴの場合は「よい」にどんな意味がこめられていたかが説明されている部分からぬき出しましょう。

- 問9 まず①段落で「よい」という言葉について問題を提起し、②～④段落で具体例を挙げて説明しています。そして、⑤段落で問題に対する筆者の考えをまとめています。
- 問10 ⑥段落では『『よい』は他の言葉に定義することもできない』と述べ、続く⑫段落までで「リンゴ」の例を挙げて説明しています。⑬・⑭段落では、「よい」という言葉の表すことをまとめています。
- 問11 イ ⑭段落に、『『よい』は同じ対象に対しても、人によってまったく反対に使うこともできる』とあります。
- ハ ⑥段落のはじめに、『『よい』は他の言葉によって定義することもできない』、すなわち他の言葉でおきかえられないと述べています。ト ②段落に、『『茶色』と『赤』や『青』を区別することができる』ように、「よい」ものともそうでないものを区別することはできないと述べています。

㊦ 出典は、^{みずうちきくお}水内喜久雄「ステキな詩に会いたくて—54人の詩人をたずねて—」〈小学館〉

- 問1 直後にあるように、「まるで、今の自分ようではないか」と感じて立ち止まるのです。また、「展開を楽しみにして、先を読みたくくなります」とあることから、筆者がこの詩に強くひかれていることがわかります。
- 問4 続く部分を読むと、自分にはまだまだ知らないことがたくさんあるのだと素直に思えることを「謙虚になっていく」と表現していることがわかります。
- 問5 西條さんが新川さんの詩について書いている中に、「虚飾やごまかしの全然無い」「真価以上に見せかけるような芸当を決してしない」「思った通り感じた通りを～のびのびと書いてゆく」と、その特徴が述べられています。
- 問6 「わたしを束ねないで」という詩にこめられた新川さんの気持ちを感じ、「姿勢を正したくな」るのです。
- 問7 「常に新しいものを見つめ、新しい詩を書かれている」からこそ感じられる思いが書かれた部分の後に入るとわかります。2の前に、「たくさん書いているのにそれ(=『わたしを束ねないで』)しかないという感じがして」「この作品から自由になりたい気持ちがある」とあります。
- 問8 「たくさん書いているのにそれしかないという感じがして」とあるように、新川さんは、「わたしを束ねないで」以外の詩も自分の作品なのだから読んでほしい、「わたしを束ねないで」だけが自分を表していると思わないでほしい、と感じているのです。
- 問9 筆者がスーツを着ていくことにした経緯を見てみると、「新川さんが着物を着ている写真」を見たり、「わたしを束ねないで」という詩を読んだりして、「ジーンズでは合わないだろうとスーツを着た」とあります。つまり、ジーンズでは失礼にあたる相手だと考えたのです。しかし、実際に新川さんをよく知ってみると、「いい紙を見ると臆してしまうので捨てるような紙に書いてい」るなど「自然体」で詩を作る人だとわかり、スーツなど着てかきこまる必要はなかったのだと感じたのです。